

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十一年三月一日発行（毎月一回一日発行）
第十五卷第十一号（通巻第一七九号）

鈴



ぐるっけ

山口誓子先生追悼号

第179号

3. 2009

俳句雑誌

GLOCKE

いしづき
石突

品川 鈴子

後家住まひ閉ぢ蠟梅の溢れたる

雪虫を惹く粗ごみの桐箆筒

暖房列車隣の袖に伽羅匂ふ

汽車で剥く蜜柑に香る袖の伽羅



再婚をひそかごととし独活和へる

石突に木目ひそめて独活は伸ぶ

独活刻む拍子木と丸・短冊に

誕生日毛深き独活を白く剥き

出稽古に追はる屠蘇器も蔵しまはずに

小晦こつご日もりただれ陽沈む水軍島



玉

鈴

吟

兵庫 唐鎌光太郎

噴煙を飛ばし木枯天へ舞ふ
日記買ふ向かう三年永きとも
廃線の市電小春の砂場脇
ルミナリエ消え去り冴ゆる夜となる
熱爛にしばし席占めふいと去る

兵庫 川合まさお

数珠玉や錆びしレールのインクライン
内陣に届く日差しの白障子
法然院足裏に伝はる紅葉冷
内陣は蛇腹天井散華菊
陶犬の足にまつはる庭落葉

大阪 河村 泰子

冬満月楷書でしるす命名軸
石路日和乳の匂の産衣干す
乳児の瞳に映りてポインセチア揺れ
寒晴の神学校よりシューベルト
白梅のほつほつと垂れ夕闇に

東京 北川とも子

ビルの底に手締くだけて三の酉
地を払ひ空まで落葉舞ひあがり
短日の人込みに身をまかせをり
小春日に拝す被爆のマリア像
雨あがり足にからまる杉落葉

兵庫 北畠 明子

長き夜のイヤホンで聴く宇治十帖
文人も時に気まぐれ吾亦紅
小春日の芝山攀るロンパース
宅配便届きて部屋に林檎の香
ルミナリエ始まるころよ暮れ早し

兵庫 木原 今女

売り物の帽で風よけ歳の市
あれそれは通じぬ素振り風邪心地
紅白の曳き綱付けて干支変り
煤逃げの夫のむすびも大きくす
ナムマイダと真似て幼は林檎下げ

愛媛 木村 美猫

伽藍へと果てなき石段しづり雪
ホットレモンさます溜息つくごとく
寒月や声を詰まらす長電話
父惚けて他人行儀のうどん鋤
重箱は要らぬ二人の年用意

兵庫 久保田由布

藪柑子紅玉は妹の誕生石
虎落笛山の獣の子守歌
虎落笛今出てゆけば攫はれる
いつまでも其処にあるなり枯芒
柚子風呂の三個亡き母吾妹

兵庫 藏本博美

電飾の聖樹の苦しみ思ふべし
波音の遠くにありて石路の花
笛にのせ売り声流す石焼芋
蟋蟀の声に炊事場暮れ初めぬ
聖夜の席ギリギリ廻す車椅子

兵庫 栗田武三

着膨れて背ナを丸めて明石焼
坤から巽へとしぐれけり
城郭の道へめぐれる村時雨
エアレーション止まりし濠に浮寝鳥
短日や出句を迫る刻太鼓

大阪 小阪律子

首竦め上目遣いに冬桜
シヤリシヤリと冬林檎食むパンドの子
網走の獄舎にヒールの音冴ゆる
庭一面天秤漬けの酢莖樽
鬼も酔うほどの辛口寒造り

東京 後藤とみ子

かいつぶりよそ見する間に見失ふ
冬の虹町名由来かど角に
枯よしに紛れてをりぬ仕掛け籠
蕎麦搔を目当てにちよつと回り道
顔見世の気合伝はるつけうちさん

大阪 小林 玲子

ピノキオのゆらりと一歩文化の日
齒刷子が諍のもと秋深む
衿巻の失せてラッシュの上野駅
膝毛布夫の体温残しおり
二科展へ乳呑み児あやし並びおり

香川 近藤 倫子

冬うらら猫の退院日も決まり
それぞれの木に時差のあり聖樹の灯
顔見世やいづれの孫も嫁に似て
冬の蚊のとどめを刺してやりにけり
角少し取れたる父とおでん鍋

薬草歳時記

(二七八) ゴバイシ (五倍子)

牛尾曜子

世を厭ひ 木のもとごとに たち寄りて
うつぶし染めの 麻の衣なり 古今和歌集

世を厭ひ、樹下でうつ伏して寝る修行僧の五倍子で染めた墨染めの麻の衣です。

本草拾遺に五倍子は収載されている。
ウルシ科のヌルデ(塩膚木)または、同属植物の若芽に、ヌルデノミミフシ(五倍子蚜虫)が寄生してできた虫嚢を熱湯処理したものが五倍子です。

東アジア各地野生の落葉小高木、葉軸に翼葉あり、夏円錐花序を頂生し、帯黄白色小花を付ける。核果は小形で扁円錐形、熟すると白色蠟様物質で被われ、塩味。

産地は、中国(四川、貴州、雲南、湖北、広西等に主産)、日本、韓国。

成分はタンニン50〜70%、主タンニンはガロタンニンで、没食子酸、脂肪、ワックス、樹脂等を含む。

用途は、タンニン酸、ピロガロール、没食子酸の製造原料、

染料、インキ、皮なめし等、衣を染めたり、お歯黒や白髪染めの原料として利用された。お歯黒の歴史は有史以前に遡るといわれ、平安時代の貴族は、男女共にお歯黒を施し、成人した事を示すものであった。その後武家に伝わり、既婚の女性が夫のあることを示すものへと変化した。お歯黒は、虫歯と歯槽膿漏を防ぎ、冷水が滲みるのを防ぎ、口臭を防ぐ効果もあつたが、明治初めにお歯黒は禁止され、衰退したのは、二夫にまみえず等の女性差別であり、黒い歯がなかなか白くならず、再婚への障害になる等である。

薬理作用として、抗菌作用、収斂作用、止血作用、解毒作用、抗真菌作用等があり、下痢、盗汗、脱肛、便血、胃腸粘膜の保護、外用として、皮膚炎、化膿症にも効果がある。煎剤、散剤、丸剤、液剤は一日3〜6g、一回3〜5g。外用は適量。

「キフシ」という名は、木のフシ(ヌルデの五倍子)という。また、実が黄色い花の咲く五倍子だから黄五倍子となったのであろう。

材が粘り強く弾力があるので、カサの柄、枝、樽の呑口や木栓、爪楊枝や灯心にも使われた。

参考文献 「日本薬局方」 廣川書店

「生薬学」 廣川書店

著者略歴 神戸薬科大学卒

キブシ (マメブシ・ムクミ) [キブシ属] (きぶし科)

Stachyurus praecox Sieb. et Zucc.

(五倍子・木附子・通条花)



果序

薬用部分：

若枝

葉 (通条樹 <ツウジョウジュ>)

果実 (木附子 <キブシ>)

夏から秋に葉をつけたまゝ採集し細かく刻んで日干しにする。



花

花期：3～4月
黄色花が密生して咲く



総状花序

須賀 6/10 六甲山にて
樹高3～4m
幹は暗褐色
悦子 画

E.S.

谷かけて木五倍子の花の擦れ咲

飯島 晴子

くもりともたそがれかともぎぶし咲く

加藤三七子

花木五倍子村につたはる瞽女の唄

松本 旭

雨ながき十々里が原の花きぶし

古館 曹人

枝しなひきぶしの金の鎖垂れ

岡田 日郎

花入れに北鎌倉の花きぶし

藤田あけ鳥

木五倍子咲く地図には載らぬ道祖神

北澤 瑞史

髪かざり作つてみたき木五倍子咲く

*片野 光子

やうやくに越ゆる馬の背花きぶし

*塩出 眞一

下流よりなまぬるき風花木五倍子

*細野 恵久
(*ぐろつけ)

鈴の奏

品川鈴子選

壁重き蔵の窓開け十二月 兵庫 村田とくみ

革手袋贈りくれたるひとのゆび
枝豆や酒量の落ちし父のこと

小豆干す傍あたらしき乳母車
会終えてみかんひとつを持ち帰る 兵庫 岩木 眞澄

憂きことのふたつや三つみかん食ふ
枯蓮の影置く池となりにけり

枯野来て原発村過ぎまた枯野
冬うらら子牛生れしと遅刻詫び 兵庫 大西 和子

薯蕷芋丹波但馬と箱を分け
ほんのりと蕎麦湯丹塗りの湯注ぎより

冬ぬくし新居に今日も小さき客
夕時雨くるりと巡る二季桜 東京 堤 節子

軽トラツク連ね枝打ち借楽園
焼芋会関係各所許可を受く

不揃ひも焦げも分け合ふ焼芋会
もてなしの鍋焼うどん父来たる 兵庫 中村 紘

酔さめて色戻り来る谿紅葉
内緒話できぬ翁ら日向ぼこ
空白の多き幸せ日記閉づ
小春日や妻のコーラス立見席 兵庫 林 哲夫

老舗には無銘も並ぶ濁り酒
冬構父のせしことうる覚え

猫の部屋炬燵囲みて吾も寝る
秋天や青のモスクに青タイル 兵庫 明石 文子

漠々の畑綿を摘む赤き服
旅先の便り届かず冬に入る

動く砂とどめる石に秋の雨
前掛に焼諸買うや福祉会 愛媛 羽生きよみ

霜焼を知らぬ子供の手を摩る
人並に師走師走と言うばかり

年の暮腸わた除く新煮干
ルミナリエ果てて港都に月冴える 兵庫 中山勢都子

冬茜煙突越しに茅渟の海

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 谷 泰子 〃

*選句は全て 品川鈴子

枝豆や酒量の落ちし父のこと
村田とくみ

若い頃の父親は酒豪のたぐいで、枝豆さえあればご機嫌に幾杯も飲み干したものです。幼なころにも豪快な飲みぶりと見えたものでしたが、最近とみに酒量が減ったことに気づき、ふと健康や年齢を思い遣る。いつまでも元気に長生きして貰いたいのが親というもの。

会終えてみかんひとつを持ち帰る
岩木 眞澄

会議に蜜柑が配られる、と聞けば気の張らない顔ぶれの集会なのでしょう。おそらく議事も満場一致で難なく進み、蜜柑を食べ残すほどの短時間で済んだ会合。親睦の蜜柑は誰もが貰って帰る役員仲間。

冬うらら子牛生れしと遅刻詫び
大西 和子

いつも時間をまもる人なのに珍しい遅刻。言い訳を聞けばみんな頷いて頬を綻ばす。冬うららかな今朝大事な飼牛が産気づき、家人も総出で手助けをして、無事に元気な子牛が生まれたとは、万歳。

不揃ひも焦げも分け合ふ焼芋会
堤 節子

地域の自治会か子供会の行事でしょうか。校庭等を借りて大きな焚火の中にさつま芋を入れて焼きます。子供達は待ち遠しくて何度も火の側へ寄って来ます。出来上がったお芋はどの子にも行き渡るように、不揃いなものも焦げてしまったものも全部分け合いました。焼芋会は事前に役所、消防署、警察署の許可を受けるのは勿論、当日も事故のないように気を配る大勢のボランティアの協力が必要なのです。

内緒話できぬ翁ら日向ぼこ

中村 紘

気の合った老人が日溜りに腰を下ろしておしゃべりを始めたものの、お互いに相手の話が聞き難く、次第に大声になつて行く事に、本人達は気付いていない様子。ユーモラスな句。(実は我家の二人も既にテレビのボリュウムがかなり大きくなりました。)

冬構父のせしことろ覚え

林 哲夫

冬構とは冬を迎える用意に家屋や庭園に防風防雪等の設備をすることです。父上はそれ等の作業を毎年完璧になさつたのでしようね。今となつては聞くことも出来ず、もつとすっかり習つておけばよかつたと後悔する作者。

漠々の畑綿を摘む赤き服

明石 文字

果てし無く広がる綿畑。熟して弾けた綿の白と、それを摘む人達の赤い服、更には真つ青な空まで想像されて素晴らしいです。昔は日本でも栽培されていましたが、今では全く見かけなくなりました。エジプト綿は繊維が長く丈夫

で高級綿製品に使用されています。もしかしてその辺りの光景でしょうか。

霜焼を知らぬ子供の手を磨る

羽生きよみ

最近はこの家にも暖房器具があり、霜焼や輝を知らない子供が殆どでしょうね。幼子のふつくらと柔らかい手を見ると思わず摩りたくなる気持、分かります。

警策に子等掌を合す冬安吾

中山勢都子

禅宗で夏の本来の安居に準じて他の時期に修行者が一ヶ所に籠もつて修行することも安居といひます。冬のお寺で坐禅を組む子供達の神妙な姿が目につかびます。警策の音が堂内に響く時、痛そうに思いますが、実は快感なのです。私も三十年前に一度体験したのを懐かしく思い出します。